

(書評)

ルイス ビンフォード
『過去を探求する——考古資料解読の方法と実践——』

渡 部 森 哉

貝 塚 (77)

2021年11月

抜刷

(書評)

ルイス ビンフォード 『過去を探求する——考古資料解読の方法と実践——』

2021年(原著は1983年、2002年に改訂版)

渡部 森 哉

(南山大学人文学部)

考古学を学ぶ者であればだれでもルイス ビンフォードの名前を知っているであろう。しかしながらこれまで、ビンフォードの著作の邦訳はなかった。まずは日本語で著作が読めるようになったことを喜びたいと思う。

本書では考古学データを扱い過去をどのように解釈するかという課題に、ビンフォードがどのように取り組んだか、その軌跡を確認することができる。しかし、これは著者が書き下ろしたのではなく、様々な場で話した講演の内容を編集し、それを著者自身が確認するというプロセスを経て生まれた本である。

本書は3部9章構成である。I部は世界の実態を知る方法についてである。いくらデータがあっても間違った考え方を有していると意義のある解釈を導くことができないと警鐘を鳴らす。II部は、考古資料を解釈するために民族誌例を用いることの重要性についてである。III部は、遺跡のデータから、人類史上の大きな文化システムの進化について論じている。

以下では各章の内容を要約し、最後に評者によるコメントを載せたい。

「序文」を寄せたコリン レンフリーは、ニューアーキオロジーの創始者として、民族考古学の主導者としてビンフォードを持ち上げる。そして続く「編集者の言葉」では本書が、1980年の秋から1981年1月までイギリスとオランダで行った講演を基にしていることなど出版のいきさつが述べられている。全9章中の7章が講演を基にしており、残り2章(第2章と第3章)が本書のために書き下ろされたものである。

「緒言」でビンフォードは、ニューアーキオロ

ジーについて、ヨーロッパの研究者が「考古学に哲学を導入し、「科学的」な装いをまとわせ、あのアメリカ人の奇妙な「物を測りたがる」性癖がもたらせた理論と考えたようである」と述べている。またビンフォードはヨーロッパの研究者を2つに分類する。1つは「考古学におけるサイエンス」を強調する専門家や技術者のグループ、もう1つは「社会思想家」(構造主義者、マルキスト、系統発生主義者他)と呼ばれるグループである。そして後者のグループの例としてイアン ホダーのグループを挙げ、著作『骨』を巡る応酬を振り返り、「このような討論は、哲学指向の理論家が行うものであり、これに対して、真っ向から対峙するのが、考古学的サイエンスの発展を願う私たちなのである」と述べる。さらには、こうした「社会思想家」たちのやり方は、まったく科学的なものではない、とまで断言する。そして本書には2つのグループを結びつける試案も含まれているという。

第1章 「考古資料の解釈」

本書の全体に関わる内容であり、データと解釈をどのように結びつけばよいかについて述べてある。考古学者が考えた解釈を評価する方法について考察を巡らす。社会科学の方法は考古学に応用するには不適切で、自然科学の方法の有効性を強調する。また解釈をすることと、必要なデータを入手することの両方をバランス良く身につける必要がある。遺物等をスタティックなもの、生活行動などをダイナミックなものとして表現し、ダイナミックなものにアプローチするためには大きく3つの方法があるという。1つ目は民族考古学的手法である。ビンフォードの関心は動物骨にあった

ので、狩猟採集民、牧畜民を対象として、ヌナミュート族、ナヴァホ族の民族調査を実施した。2つ目は実験考古学的手法である。3つ目の方法として適切な文献資料や写真の応用がある。

最後に考古学の大きな3つの課題を挙げている。1つ目は初期人類についてである。人類を他の動物から区別すると考えられる行動の特徴がいつ頃から出現したのか、そしてその発展をどのように理解すべきか。2つ目は人間が移動性の高い狩猟採集生活から定住性の高い生活様式へ変化した理由についてであり、それは農耕の起源と直接関係する。3つ目は、文明の起源という大きなテーマである。考古学は、こうした諸問題に他の学問領域とは一線を画する独自の見解を提出できるし、その方法について本書が書かれた。

第I部「それは、どのようなだったのか？」は書き下ろしの2つの章から構成される。W. テイラー教授の言葉を励ましとして受けとめ、考古学者がどのように解釈を進展させるかについて例を示す。事例として、初期人類が狩猟民であったのかどうか(第2章)、ベースキャンプに住んでいたのかどうか(第3章)という問題が取り上げられる。

第2章 ヒトは、力強いハンターだったのか？

本章は前期旧石器時代の研究である。レイモンド ダートから研究史をたどる。ダートは、化石人骨を見つけ、初期人類がどのような「行動」をとっていたのかに注目した。まず人骨とともに発見された大量の動物骨を調べた。動物の頭蓋骨、下肢骨は多いが、肋骨や脊椎骨、骨盤は極めて少ない。それを解釈し、ホームを有し、そこに動物の一部を持ち帰る強い殺し屋というイメージを作り上げた。

しかし体重40kgほどの小動物であった初期人類がそのような大量の動物を仕留めたわけがないという反論が起こる。そして人間の証拠に、他の動物の行動がどのように関わっていたかを理解するためには、動物の特徴をより詳細に知る必要がある。

その後ルイス リーキーの調査により、本質的には肉食者であり肉があるときには食べた、という解釈が広まった。しかし、その後発掘区を拡張

してみると、大型動物の骨が見つかるようになり、ダートの解釈が復活した。グリーン アイザックは人類進化の初期段階から人間的な行動をとっていたと主張した。では一体どのようにして生き生きとした生活風景を描くことができたのか。

1960年代に南アフリカのC. K. ブレイン教授は革新的な研究成果を発表した。その問いは、遺物はどのようにもたらされたのか、いかなる形成過程を経たのか、であった。人骨は密集した動物骨のなかから発見されるため、まず堆積物全体の構成を知る必要がある。検討の結果、岩の亀裂に動物が落ち込んだために堆積したのだらうという。つまりホームという考え方は不適切であることになる。そしてホッテントット族で民族調査を行い、動物の骨の各部位の相対的な出現頻度に著しい偏りがあること、それは犬が骨を荒らすことが一因であることが突き止められた。ピンフォードは同時期に似通った考えで調査を進めていたブレイン教授の存在に驚いた。名前さえ知らなかったという。

更新世に戻り同様の手法で行動を復元し、初期人類は他の動物に食べられそこに残存し、初期人類にとって骨の中の骨髓が食料としての価値があったと解釈する。初期人類は死屍漁りを行う脇役の動物であった。

第3章 水辺の生と死

アフリカの現在の狩猟採集民は水辺近くにキャンプを設営しない。それにもかかわらず、東アフリカの多くの考古学者は、初期人類は水が必要だったので、水辺にホーム ベースを設けたと主張する。そもそも食事と睡眠行動を同じ場所で行っていたという根拠は何か。ピンフォードはこれまでの前提を「あと付け議論」であり、根拠はないと断じる。

夜の支配者である捕食動物は、昼間、有蹄動物が使っていた土地に姿を現わし、水辺を占領する。ハイエナは最初に水を飲みに来て、その後、乾いた骨を囓りに行く。

また初期人類が骨の堆積にまったく関与していなかったとしても、水辺の近くに骨が堆積する様々な要因がある。残肉漁りをするための石器を作り、動物死骸が見つかるまでそれらを持って歩くが、多くの場合は獣たちが集まりやすい水辺周

辺で使用して、石器を捨てたという解釈を提示する。つまりホーム ベースではなく死肉を漁り消費した場所だったということになる。石器と残存骨と一緒に発見される場所の意味を、問い直す必要がある。そして現存の伝統社会の研究が、考古研究に刺激を与えることを強調する。

第Ⅱ部「それは、何を意味するのか？」は4つの章から構成される。循環論法に陥らずに議論を進めるための方法について論じられる。

第4章 ムステリアン文化問題への挑戦

ネアンデルタール人が活躍した中期旧石器時代が扱われる。議論の軸として、フランスのフランソワ ボルドの研究が取り上げられる。

ムステリアン問題とは、一時期の遺物が多くの遺跡で変異 (variability) を持って出土したため、それをどのように解釈するかという問題である。

研究史を繙くと次のようになる。時期差や地域差を示す特性が、年代や地域を示唆する指標として用いられた。そして進歩したという考えに基づき、文化発展の「段階」という概念が用いられた。その後、遺物の組み合わせが注目され、それらに対応するエスニック グループが想定された。そして、異なるインダストリーは、発展段階ではなく、同時代の異なる集団を示しているという考えも出てきた。

ボルドは、石器分類の方法を考え出し、量的な分析を行った。ムステリアンの4つパターンを見いだしたが、それをビンフォードは「パターン認識法」と呼んだ。その上でボルドは、あるグループから別のグループに置き換わる、併存する、変化しない、という3つの特徴を抽出した。しかしながら、過去の文化を古い生物学的モデルと同様に考えたことが問題であるとビンフォードは指摘する。

過去の遺物のまとまりの流れを、アメリカの研究者は「文化的樹形図」、ヨーロッパの研究者は有機体の「命の樹形図」としてみる。アメリカの研究者は、文化形態と環境の相関に着目し、グラデーションと表現される文化の濃淡伝達があるために、民族グループを他のグループから明瞭に区別することが極めて難しいことに気づいていた。文化の解釈においてヨーロッパとアメリカの研究

者の間に相違が存在するのである。

ビンフォードは、ボルドの分類は何を分類したのか、異なる遺跡で観察された遺物組成は何を意味するのか、と問いかける。データはある特定のパターンを示し、ある文化は継続し、ある文化は短期間に消えた。こうした石器の消長パターンは、文化の多様性という性質と矛盾するようになり、ビンフォードはボルドとは異なる理由で起こりうると主張した。つまり文化の共存ではなく、人間行動の相違を示すと考えた(第5章、第6章参照)。

第5章 考古オデッセイ

著者ビンフォードが本書執筆時までの20年間の研究の歩みを振り返った章である。

1950年代後半から60年代の前半にかけて、考古学者は帰納的戦略に依存していた。もし新しいことを知りたいならば、新しい方法が必要であった。しかしその時点では、「観察した事実に対し、どのような意味を与えられるか」を考えていなかった。

その時から、農耕の起源と、ムステリアンの変異性、という2つの大きな問題があった。後者はボルドの型式分類に対しての反論ではなく、考古資料のパターンの意味の解釈という問題である。そこで考古資料に内在するパターンを多変量解析で見つけ出す方法を導入した。

1967年にはフランスに滞在したが、芳しい成果を上げることはできなかったことが吐露される。人間行動によって異なる石器組成を生み出すのではないかという仮説を証明することができなかったのである。その結果を受け、1969年にはイヌイットとともに生活し、民族考古学的な調査を行った。

民族考古の調査を通じて、農耕の起源について考えるには、狩猟採集民が負っている生態・経済・社会条件という変異性幅を知る必要がある。1970年代には、①動物骨組成に関する方法論的研究、②人間行動の結果として表れる残骸物の分布と遺跡構造、③汎世界的な狩猟採集民の比較研究、の3つの主要研究テーマが整理された。

ニュー アーキオロジーは1968年の論文集から始まったとされるが、ビンフォード自身は議論に加わらなかった。ビンフォードは考古学データと科学的理論の関係について議論し、それを結びつ

けるには現在世界で同一事例を探す必要があると主張したのに対し、一部の考古学者は、全て演繹的手法にのっとして理論を展開すべきである、と主張しはじめた。しかし、演繹法は考え方の評価のために用いるものであり、データの解釈そのものに使用するべきではない。またニューアーキオロジーの動きの中で、行動考古学、社会考古学、天文考古学といった新しい分野が生み出され、現在も継続している。しかしこれはアメリカ考古学における特殊な状況下の議論であるとして、ビンフォードは距離を置いた。科学的議論には思えなかったからである。

ビンフォードが目指したのは、健全な推論法の確立であったのだが、それはまだ日の目を見ていない。だから考古学はまだしっかりした科学になっていない。

第6章 自然環境の中のハンターたち

民族考古学の調査に関する章である。

ボルドは、石器組成の相違は異なるグループに起因すると考えた。それに対しビンフォードは異なる場所で、異なる行動をした結果であると解釈する。それを証明するために民族考古学の調査を実施した。提示されるのは移動性の高いグループが変異性を示す例である。

ヌナミュート エスキモーは、年間のサイクルを通じて複数のベースキャンプを周回する。5つの家族が占有した核居住域は、古典期ムステリアンの遺跡があった地方と同じくらいである。ボルドはこの範囲の石器組成の構成差は、4つの異なる文化グループによるとするが、この解釈は支持しにくい。これまで旧石器時代の遺跡を、定住的な見方でアプローチしてきたことが問題である。また遺跡の規模は、そこに住んでいた集団の大小差に結びつけることはできず、どれだけ再利用されたかによる。

1つの核居住域における滞在期間が約10年で、一人の男性が一生の間に住む場所は、大体5つの地区からなり、およそ300,000平方キロメートルの範囲で動物を追って動く。また各種遺跡をまとめて1つの集合として、「複合遺跡」として見るやり方が紹介される。アナヴィック スプリングス複合遺跡は狩猟キャンプ、射止めて屠殺する場、肉を保管する場、の3つの遺跡タイプから構成さ

れる。

多くの遺跡は1つの大きなシステムによって纏められているので、個別に扱うべきではない。また解体遺跡など、一度に約50頭のカリブーが仕留められ、その結果膨大な骨がでた。それは毎回の食事から出たごみではない。異なる人間行動が異なる痕跡を残すのであり、他の普通の遺跡と区別して認識する必要がある。狩猟採集民のセトルメントパターンは、地域レベル、核居住域レベル、複合遺跡レベル、個々の遺跡レベル、行動レベル、といくつかのレベルで考える必要がある。様々な性格を持つ行動、各種の機能を持つ場所という問題は、ボルドが報告したムステリアン資料にも含まれていた。ヌナミュートの土地利用の変異性や多様性は、伝統的考古学のアプローチでは説明がつかないのである。

遺跡の類似性に基づき同じグループにしたり、別のグループにしたりという方法では、遺跡を正しく意味ある方法で纏めることはできない。異なる遺跡で異なる人間行動の跡が、実は同じグループの人々の別々の構成要素である、ということをどのように認識するのが課題である。

第7章 生活空間における人々

個別の遺跡内の空間構造をどのように理解するのか、民族考古学的な事例が列挙される。

遺物組成の違いは遺跡の性格の違いに関係している。一方で、空間利用に関しては遺跡間で共通性もある。どの遺跡にも共通するのは、人体の大きさである。遺跡では備品・施設の分布がそこで人間活動を反映している。

住居を伴わない遺跡の場合、いくつかのパターンを想定する基準を確立する必要がある。「活動」「道具一式」「活動空間」という概念を用いて記述する。これらの関連を見いだすために多変量解析が必要となる。

遺跡構造のパターンを論じるのに次のような例が列挙される。炉端での作業（坐る位置を確保するため少し離れたところに骨を投げる）、屋内炉と屋外炉（屋内ではゴミを壁に向かって投げ捨てることはしない）、寝る空間（冬は壁に平行に、夏は直角に並ぶ）、寝床での朝食（寝床の周り、ドア近くにゴミの山がある）、広範囲の活動空間（カンガルーのロースト用の炉穴とその作業には

17-24平方メートルの空間を利用、カリブーの解体には30平方メートルの空間を利用)、遺跡構造(ある空間モデルが遺跡全体の構造とどのように噛み合うか。人間の身体は大体同じ大きさなので狩猟採集民の空間パターンには共通性がある)、などが事例として取り上げられる。

また「パラナガ民の家の中」「エスキモー民の家の外側」で具体例が詳述された後、「熱と光」(家の中の空間利用を規制する2つの要素)、「作業の回転率」(短時間で終わってしまう仕事には、特定の空間は必要ない)、「残滓量の影響」(長期間滞在する家では空間がきちんと片付けられる)、「清掃戦略」(ゴミの問題を、場所の使用頻度などから考える必要がある)の説明が続く。

最後の「遺跡構造論の構築」では、日光と気温を考える必要があること、移動が少なく安定性の強い集団であれば作業規模が大きくなることなどに注意を喚起する。そして、考古学的要素の組み合わせが異なる場合、必ずしも2つの組織に起因するのではなく、同一組織の機能的差異から生じることもあることを再度述べる。現在の課題は、様々に変化する考古的様相を単一のシステムであるということ認識し統合することである。

第Ⅲ部「それは、なぜ起こったのか？」では人類史における大きな2つの変化がとり上げられる。

自分の理論を正当化するために後から集められた証拠は、独立に存在することはないため、正当化され得ない。歴史学者や民族誌学者が発展させた一般理論を援用して考古記録の説明に用いることはしばしばトートロジーに陥る。そのため、民族誌学的・歴史学的事象を検証するために必要なミドルレンジ セオリー(広範な一般理論ではなく、調査によって検証可能な範囲の理論。訳者あとがきのpp. 264-266を参照)を構築する必要がある。ここでは農耕の起源、文明社会の形成、が事例として取り上げられる。

第8章 農耕の起源をめぐる

ピンフォードは農耕の起源に関する先行研究の整理をし、いずれも不十分であることを論じる。

チャイルドは環境条件から農耕の起源を論じた。チャイルドの理論は乾燥期があったという歴

史モデルを含んでおり、それが否定されれば説明は成り立たない。ブレイドウッドはそのように批判した。しかし人間が時間をかけ、徐々に学ぶ事で農耕が発達したのだ、と論じたブレイドウッドの環境から説明するモデルも同様の問題点を抱えた。またピンフォードの1968年の論文で提示した、人口に着目したモデルも不適切であることが判明した。

非農耕民が直面している環境上の問題を解決するために農耕が生まれた、と考えることができる。逆に、環境が豊かであれば農耕が必要ないことになり、それをピンフォードは「エデンの園論法」と呼ぶ。そして人間は必要がなければ食物さえ採ろうともしないという考えを「なまけものの法則」と呼んだ。

いずれの考え方も目的論的であり、漸進主義を取り入れ、人間が知識を発達させた想定している。しかし定住の後に農耕が起こったケース、植物栽培が定住より先に出現したケースがあるため、定住が農耕を引き起こしたとは必ずしも言えない。

ピンフォードは先行研究を振り返った上で、ダーウィン主義的に、環境と適応システムとの間の相互作用の中に農耕へ転換させる圧力があるという。そこでまず、移動生活より定住生活の方が望ましいという前提を検討する。狩猟採集民は、食料が多いときに移動するのが当たり前である。いざというときに必要な情報を集めるためである。移動生活が安全なものではないものにしてしまった何かが、決定的な強制力だった。そして人口増加が、この問題に何らかの関連があるという。

地球上の生物の平均最適温度である14.4°Cにおいて、ほぼ密度が最高になる。人口過密モデルによれば、①以前とは変わった動物種への変換、②植物への依存の増大、③人口が増大すると農耕が必須となる、というプロセスを経る。しかし考古学で人口増加、人口密度増加をどのように測定できるのかという問題がある。このモデルから敷衍されるのは、狩猟民が動物の群れを管理して飼育する試みが、植物栽培より古いということであり、それに合致する事実も見つかっている。

いずれの考古記録の事実に対する解釈も単に「あとから辻褃を合わせる議論」に過ぎず、逆に考古記録によってその理論は補強されていく。各

種の理論を評価するためには、過去の動態を解釈する考古理論から独立した推論法、ミドルレンジセオリーを発展させる必要がある。

第9章 複合化への道のり

高度な社会組織の出現に関する最近の理論をまず批判する。

農耕の始まりと余暇の発生という考えは、狩猟採集民の事例から不適切である。またある文化には自動的に発展する力が内部に組み込まれているという定向的進化論も不適当である。

ビンフォードがこのテーマについて学び始めたとき、2つの理論が流行していた。1つの流れにマーシャル サーリンズ、もう1つの流れにはビンフォードが位置づけられ、当然ながら前者が批判的に取り上げられる。

民族誌を読むと北米には2つの好対照な組織が存在したことが分かる。1つは食料の独占に基づく、小さいが伝統的で内部が階層化されていた集団。もう1つは広範囲にまたがる政治的連盟であり、個人が権力を行使するのではなく各小集団を代表する者たちが代表者会議を構成していた。ビンフォードは、権力は生産物の独占から生じるという。これは北米の高度な社会政治的秩序と強固な専制的基礎を築いたグループに対して有効なモデルであり、例えば、遡河性の魚が重要な食料源になっている場合、「特定の地点」でのみ安定的に確保できる。しかし多くの場合は構成員が3,000人を越えることは殆どない小さな政治的集団であった。広範囲にまたがる政治的連盟は、3,000人を越える単位であり、連合体や他の民主的な政治形態をとった。

サーリンズは、大衆を不当に搾取する専制君主が、複合社会の首長の姿であると考えていたが、調査してみると、利他的行為を果たす好人物であった。そのため、定住性を前提とすると各地で生産物は異なり、首長が財を再配分することで、住民が広い範囲の生産物を平等に手に入れることができる」と説明した。

このようなサーリンズのモデルに対し、太平洋の島では、政治的領域は海岸から内陸に延びるので内部に多様な環境を内包することから、自給自足的傾向が強くなり、他の社会と同盟関係で生産物を手に入れるという事はあり得ない、という

批判が起きた。また、ニューギニアやボルネオの高い地位の人々と結びつけられる再分配的な経済システムは存在していなかったことに対し、サーリンズは、ニューギニアの社会をビッグマンシステムと呼び、複合社会ではない別のシステムとして取り扱った。しかしビンフォードはビッグマン社会こそが社会の複雑化の始まりの鍵であるという。

ビッグマン同士は互惠的交換に基づき同盟的關係を確立させようとし、互いに名声を得、各ビッグマンに従属する従者は生活の保障を確保できる。ビッグマンの周辺には住民が集まり、一方で他の安全な保障を提供してくれるビッグマンの所へ移り去る可能性も内包している。このシステムでは、財ではなく人々が絶え間なく動く。

ビッグマンの地位は世襲ではなく、特定の者が継承することはできない。ある種の独占ではあるが、貴重な資源を獲得できる選ばれた人間による独占とは、かなり異なる種類の独占である。ではビッグマンシステムから複合社会へどのように移行するのか。ビンフォードは、「何の咎めもなく社会関係を破綻させることができる時に、権力が生じる」、「権力とは、自分が得になるルールを作ること」と述べる。先史時代には、物財ではなく、消費者自身の流出入という調節を伴うシステムが一般的であったと思われ、そこから考える必要がある。

近年の社会の複雑化のモデルで重要なのは、①どのような刺激が、自給に必要な量を超え、食料を生産させるようになったのか、②それにより生じた余剰食料は、複合社会の形成においてどのように利用されたのか、である。ビンフォードは、あるシステムは外部からその組織へ圧力が加えられない限り、変化をしないという「慣性の原理論」を受け入れる必要があると主張する。そうすると、生産物の増加により解決された問題は何かという問いになる。さらにそれまでの緩やかな社会発展パターンと異なり、階級や階層化の成立といった社会形態の大きな変化を説明するためには、「ある種の大きな飛躍」を考える必要がある。狩猟採集民では同じ様な単位の集団が複製され増殖するが、ある時点で1つの構造的飛躍が現れる。つまり、自ら同質の複製単位を再生産するのではなく、個人を排除させる慣習を発展させ始める。基本的

に集団単位の大きさは変化せず、余分な個人は集団から排除される。この状況での人口増加は、集団から排除された人々の増加、社会の中における競争、グループ間同士の競争に変化を引き起こす。

ピンフォードは交易モデルの批判を続ける。広範囲を占める交換システムは、世界を見渡しても、いわゆる「偉大なる文明」が発展した場所では知られていない、という。高度に発達した複合社会として一般的に受け入れられている社会の出現以前に、この種の広域交易は存在していなかった。だから、再分配は権力の発生に繋がるというサーリンズの理論は受け入れられない。

問題へのアプローチが異なると、結論は同じになるべきである。自分たちの仮説を正しく評価する方法を見つける必要がある。

【コメント】

以上、本書の内容を評者の興味関心に従って要約した。次にコメントを述べる。

評者は南アメリカ、特にアンデスを専門とする研究者である。アンデス考古学者の多くはアメリカ人であり、当然ながらアメリカ考古学のしきたりに従った論文が生産される。阿子島香氏が主張するように、ピンフォードに端を発するプロセス考古学的手法は、アメリカでは主流派である（阿子島・溝口 2020: 24-25）。

アメリカ考古学は人類学の一部であり、その主な対象は先住民インディアンである。雑誌論文は、単なるデータ提示のみでは不十分で、理論的な考察が求められる。まず理論的な考察と先行研究を組み合わせた記述からなる前半部があり、その次にデータ提示がされるというのが一般的である。そしてプロセス考古学者はできるだけ一般法則を求める。普遍性を重んじ、個別性は歴史性という概念で説明される。アジアやヨーロッパの考古学は歴史の再構成が主であり、重点の置き方が異なるのである。一方で、アンデス文化の独自性を強調する流れもあり、それは歴史資料などを用い、ポスト プロセス考古学的な議論と位置づけられる。例えば、ミイラを安置するチュルパという塔状墳墓からアンデスの独自性を強調する著作などがある（Isbell 1997）。つまり、プロセス考古学とポスト プロセス考古学の傾向は、人類としての普遍性と文化の多様性のどちらに着目するかの

違いとも言える。

以上のように整理すれば、ムステリアンの器種組成の違いを集団の違い（文化の違い）ではなく、同一集団の行動内容の違い（普遍性）とするピンフォードの立場が理解できるであろう。さらには農耕の起源については世界各地で独立して発生したため、それを照らし合わせることで普遍性が抽出される。社会の複雑化（複合化）についても、サーリンズの立場と自分の立場を対比させた上で、単一モデルで説明しようとする。世界のいくつかで始まった複雑化の動きを、文化の多様性、歴史性、個別性に解消させずに、それを貫く統一規則を見いだそうとしようとしている。それは非常に魅力的なアプローチであるが、社会の複雑化がより進んだ時代を扱うとすると、文化の個別性が目立つようになってしまい、通文化的な普遍性を見いだす議論はしにくくなる。つまりプロセス考古学は、古い段階、小規模な段階を対象として、大きなタイムスパンで議論するのに適している。一方、ポスト プロセス考古学は、当然ながらその逆の対象が望ましい。また、プロセス考古学的手法では、ある時点での遺跡の構造などを、写真のように解釈することも得意であるが、ポスト プロセス考古学的手法では、それぞれの遺構での活動が複雑であるので、ある時点での活動を切り取り解釈すること自体が難しい。どちらが正しいかどうかという問題ではない。これは訳者である植木氏も強調していることである。

日本考古学のデータを整備する方法はどちらのアプローチでも基礎となる。しかしデータの精緻化自体は議論、解釈ではない。データを議論とかみ合わせる努力は、各地域で引き続き切磋琢磨して続けていくべきである。

プロセス考古学的議論が普遍性に着目する、あるいはそれを暗黙に前提としているということは、ピンフォードの論の進め方から明らかである。ムステリアンの解釈をするために、北米の狩猟採集民の事例をモデルとする。あるいはアフリカ、オーストラリアなども含まれ、地域は限定されない。さらには時代を超えて、ホモサピエンスとネアンデルタールの共通性に着目、あるいは前提とした議論を展開する。一方で、ポスト プロセス考古学的議論は基本的に地域限定的であり、文化

という枠組が強い。アンデスであればインカ帝国のモデルが先スペイン期のアンデス諸社会の解釈に用いられる事がしばしばあるが、他地域の事例が引き合いに出されることはない。文化の個性、多様性に着目し、それを前提としているのである。であるから、ビンフォードの議論に対して、ヨーロッパのムステリアンの解釈になぜ北米の事例が当てはまるのかという批判があってもいいのであるが、そうした批判が不毛である狩猟採集民としての共通性というレベルにこだわり、それ以上のことは言わないのである。ヨーロッパと北米の狩猟採集民の違いは何か、という議論に進めば研究の新しい段階となろう。逆にポスト プロセス考古学者は、各文化の個性ばかりに着目する研究から、そうした各文化の多様性を貫く人類としての普遍性をどのように議論するか、という問題提起がなされ、それに真摯に答えようとすることで研究は新しい段階に突入するであろう。いずれにしてもそれは大きな仕事であり、個人でできるようなものではない。ビンフォードのようなカリスマ的な主導者が、多くの研究者を方向付けて時代の流れを作る必要がある。

誰がプロセス考古学者かどうかという議論は不毛であり、それぞれの研究者が既存の理論を斟酌、反芻して自分の研究に応用している。しかしそれでも学閥というか、研究者を纏めてみると見えてくる傾向はある。例えば、ミシガン大学はまさにプロセス考古学的な傾向が未だに強い。

ペルーでは、1940年代にシステムティックなセトルメント パターン研究が始まった。その起源はいわゆるニュー アーキオロジーの流れとは別であるが、アンデス考古学では、セトルメントパターン研究とプロセス考古学は連動して発展した。ある河川流域、ある盆地を対象として、網羅的に遺跡分布を調べ、表面採集した遺物(土器)によって時期区分をして、時期変化を探るといえば定番とも言える研究が量産された。究極的には、一般法則の樹立に向かっており、その解釈の仕方はワンパターンに見える。こうした研究手法の対極にあるのが、特定の遺跡、特に大遺跡から全体を俯瞰する研究である。しばしば、墓や大規模建造物を扱うので、支配者層のみに着目するとして批判、揶揄される。しかしセトルメント

パターン研究も、大規模遺跡の発掘も、同じ社会の異なった見方に過ぎない。研究目的によって、こういった手法が有効かは異なるのである。

プロセス考古学の特徴は、一般法則を求めることその他、大きなタイムスパンで観察すること、従って当事者には認識されない特徴を抽出する、いわばエティックなアプローチという側面が強い。従って、狩猟採集から農耕社会など、初期の動き、あるいは長いタイムスパンで物事をみなければならない場合に有効である。アンデスでも、文明形成などにはこうした見方が未だに根強い。一方で、後の時代になれば、それぞれの地域で発展した結果の社会を対象とする。その場合、複雑化した社会であれ、あるいはそうでない社会であれ、より短いタイムスパンで議論することになる。そして多くの場合は、墓などのデータの精度がより高くなり、当事者の意向を汲み取ろうとするエミク的なアプローチという性格が強くなる。それは、ポスト プロセス考古学的な議論の特徴を色濃く示すことになる。「筆者がヌナムト エスキモー民に、かれらが土やゴミに対してどのような考えをもっていたか質問しなかった」(p. 16) ということが、学生からビンフォードの調査の欠点として指摘されたというのが、言説分析というエミク的なアプローチと、ビンフォードが目指した方法とはポイントがずれているのである。また第1章で社会科学ではなく自然科学的な方法の重要性を強調しているが、現在の研究状況に照らし合わせると、プロセス考古学は定量分析を行う社会科学的な方法と、ポスト プロセス考古学は定性分析を行う人文社会的なアプローチと親和性が高いと言える。

従って、同一の対象を扱っても、そのアプローチの仕方には複数ある。ビンフォードは基本的に狩猟採集民を対象としており、中でも特に狩猟民がテーマであった。そして農耕の出現という問題についても、その前段階の狩猟採集民からアプローチするという姿勢で取り組んでおり、一貫している。自分の研究テーマにふさわしい手法を鍛え上げたというべきであろう。逆に、文字資料などが残っている場合はポスト プロセス考古学的なアプローチがしやすくなる。研究テーマによりふさわしいアプローチは異なるのである。

あえて大胆な比喻を用いて、熱い社会と冷たい

社会というレヴィ=ストロースの区分に従えば（レヴィ=ストロース 1970[1965]: 220）、プロセス考古学は冷たい社会の分析に適しており、ポストプロセス考古学は熱い社会の分析に適している。レヴィ=ストロースは南北アメリカ大陸の神話研究を縦横無尽に行ったが、それと同様に、地域を越えた分析を行ったのがビンフォードである。その意味で、考古学におけるビンフォードはレヴィ=ストロースのような立場の研究者として位置づけられるであろう。単なる事例研究にとどまらない、人類史の普遍的特徴を追求する姿勢を示したと読み取ることができる。

ビンフォードの考古学データから解釈を導く際には根拠を示せ、という主張は当たり前のようであるが、しばしばなされていない。また、援用する前提が自分が用いる方法から独立して導かれたものでないとトートロジーに陥るといふ警鐘は、常に気をつけていくべきであろう。一方で、ビンフォードは演繹的なアプローチは考え方の評価に使用するべきであるというが、それをデータと結びつけることも方法論として確立していくべきである。ある仮説を持って、それを検証するために考古学データを求める、という議論の仕方はあつてしかるべきであり、アメリカの博士論文の多くはこの形である。しかし、その仮説の立て方についても、より堅実な方法が求められる。それについて、考古学の分野で明示的に議論を進めるべきであるし、他分野の応用も積極的にすべきである。

最後にいくつか疑問点を挙げておこう。本書には十分に理解できない点もいくつかある。例えば、第5章で「筆者にとり究極の関心事は、農耕の起源とムステリアンの変異性を解釈することであり

ました」（p. 104）と書かれている。ではムステリアンをどのように考えているかというところ「中期旧石器時代の遺物、つまり、人類としてはだいたい現生人類と同じであるが、農耕というものをまだ知らなかった人々により製作された遺物」（p. 13）とあることから、ネアンデルタール人と現生人類の違いをそれほど大きく捉えていないように思えるが、一方で、現生人類出現前と後では生物学的にも行動面においても大きく違っていた、とも述べている（p. 192）。動物としての共通性に依拠するのかという点は、ビンフォードの民族考古学的手法をムステリアンに応用する際に検討しなければならないことであろう。また第9章では社会の複合化を説明するために人口増加を要因として持ち出すのであるが、人口増加がなぜ起きるかを説明していない。さらに図版147枚中40枚が掲載不可であるため、原著で確認する必要がある。

本書最後（pp. 237-297）には訳者の長文の解説が載せられている。これは本書の内容を理解するために極めて有益である。本文と同様に精読していただきたい。

引用文献

阿子島香・溝口孝司（監修）

2020 『ムカシのミライ——プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話——』、勁草書房、東京。

レヴィ=ストロース、クロード

1970[1962] 『今日のトーテミズム』（仲沢紀雄訳）、みすず書房、東京。

Isbell, William H.

1997 *Mummies and Mortuary Monuments: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization*. University of Texas Press, Austin.

(2021年9月14日受理)